



The Pragmatics Society of Japan

日本語用論学会

NEWSLETTER

<http://www.pragmatics.gr.jp>

No.54 / Fall 2025

会 長 秦 かおり

事務局 〒181-8612 東京都三鷹市下連雀 5-4-1 杏林大学外国語学部 八木橋宏勇研究室内

事務局連絡先 secretary-at-pragmatics.gr.jp

郵便振替口座 00900-3-130378 口座名：日本語用論学会

ゆうちょ銀行口座 記号・番号：00900 - 130378 日本語用論学会

支店番号：099（店名：〇九九） 当座預金 口座番号：0130378 日本語用論学会

特別寄稿

中国語用論学会(CPrA)第 13 回年次大会に参加して

堀江薫（愛知大学）

今回、秦会長より申し付かり、上海市にある同済大学（国家重点大学の一つ）で開催された中国語用論学会(China Pragmatics Association, CPrA)に日本語用論学会(PSJ)を代表して参加し、招待講演および学術交流を行ってまいりました。今回の派遣は CPrA からの招聘によるものですが、両学会間の交流協定の申し合わせにより、PSJ から旅費の支援を受けております。本学会からのご支援に感謝申し上げますとともに、やや長くなりますが、以下にご報告をさせていただきます。

PSJ と CPrA は林宅男元会長の在任中に交流協定を結び、これまで相互に先方の学会を代表して研究者 1 名を大会に招聘し、招待講演や特別講義を行ってもらうという形の学術交流が続けてきました。しかし、近年はコロナ禍等で PSJ 側から CPrA の大会への招聘研究者の派遣が途絶えておりました（滝浦前会長、秦現会長は事前に収録した動画を CPrA の大会で投影する形で招待講演を行われたと伺っております）。そのような事情もあり、PSJ と CPrA の間に交流協定が結ばれ 10 年以上がたちますが、CPrA から派遣された研究者が PSJ の年次大会において行っている「特別講義」を除けば、CPrA との交流

の実態が十分に明かでないように思います。この報告が今後の PSJ の国際的な学術交流のあり方を考える上でいくらかでもご参考になれば幸いです。

今回の CPrA の大会は、8 月 22 日（金）午後には若手研究者によるワークショップが開催され、メインプログラムは 23 日（土）午前から 24 日（日）正午まででした。全体のテーマは、「社会変革のための実用的イノベーション研究」で、参加者は 400 名以上だったそうです。以下、PSJ との比較で、CPrA の大会の構成や内容について気づいた点を共有させていただきます。

今回の CPrA の大会は PSJ とはかなり異なるプログラムの組み方でした。具体的には、初日（23 日）の午前に開催校の挨拶や、CPrA の現会長の冉永平（Ran Yongping）北京外国語大学教授の挨拶に続いて、中国の研究者による招待講演 2 件、私を含む 3 名の海外からの招待講演者の招待講演 3 件の計 5 件（各 30 分）が休憩をはさんで連続して行われました。二日目（24 日）の午前も 4 件の中国の研究者による招待講演 4 件が連続して行われました。このように、多くの招待講演を集中してリレー式に行うのは PSJ では行われていないプログラムの組み方です。さらに、初日の午後には、語用論の様々なテーマに関する 24 にも及ぶパネルがパラレルで開催されました。一方、個人の口頭発表セッションは皆無でした。この点は、パラレルの口頭発表セッションが主流の PSJ とは異なっており、むしろパネルが中心の国際語用論学会(IPrA)と似ていると感じました。

パネルのテーマには以下のようなものがありました。「時代におけるミームコミュニケーション」、「語用的アイデンティティ研究の新たな進歩」、「子どもの言語と語用論的研究」、「デジタル公共外交言説に関する語用論的研究」、「公共の文脈における対人関係と社会語用論の問題」、「制度的会話における構成員の分類とアイデンティティ構築に関する研究」、「デジタル知能時代における外国語語用語教育に関する研究」、「ソーシャルメディア言説に関するメタ語用論的研究」、「語用論の視点からみた AI エージェント言説に関する研究」、「中国の歴史的語用論に関する研究」などです。PSJ のワークショップで見かけそうなテーマもありますが、全体に社会語用論的なテーマが多いという印象です。これは今回の CPrA の全体テーマが「社会変革のための実用的イノベーション研究」であったことと無縁ではないと思いますがお国柄もあるものと思います。

また、これも PSJ と異なる点ですが、今回の CPrA 大会では、海外からの招待講演者以外の中国人研究者の講演やパネルは、英文タイトルであってもすべて使用言語は中国語でした。結果的に、PSJ の代表として日本から参加した私と、韓国の認知・談話系の学会を代表して参加した韓国カトリック大学(Catholic University of Korea)の Chang-Bong Lee 教授、(厳密な意味での海外ではありませんが)香港から招聘された香港大学の Olga Zayts-Spence 教授のみが英語で講演を行いました。因みに、3 名の講演題目は以下のとおりです。

- Pragmatics of a 'Nominalization'-prominent Language: A Case Study from Japanese in Contrast with Chinese and Korean (Kaoru Horie)
- Reflection on Social Pragmatics through a Case Study of Gender Conflict in Korean Society (Chang-Bong Lee)
- The Sociopragmatics of Health Communication Research in China: Current Trends and Potential Contribution to Addressing Public Health Challenge (Olga Zayts-Spence)

私の知る限り、PSJ や JCLA (日本認知言語学会)ではタイトルが英語であれば使用言語は原則英語です。実際に、JCLA では、これまでも、海外からの招待講演者が、英語で行われるシンポジウムやワークショップで発表者や指定討論者を務めたり、英語の口頭発表を聞いてコメントをする、といった交流がこれまでもありました。この点、CPrA は、参加者の大多数が中国人研究者であり、英語が十分理解できない方もいるということに配慮してかと思いますが、海外

からの招待講演を除き、英語タイトルであっても使用言語は中国語でした。それは理解できなくもないのですが、我々3名の招待講演者にとっては、英語タイトルの講演やパネルにおいて、共通言語の英語を介して、中国人語用論研究者の研究に触れ、質疑に参加する機会がなかったのは学术交流という点では残念でした。

もっとも、今回、招待講演者の韓国の Lee 教授と香港の Zayts-Spence 教授、中国語用論学会会長の冉(Ran)教授、前会長でこれまでも PSJ の大会に複数回来られている陳新仁(Chen Xinren)南京大学教授、そして同済大学で開催校責任者を務められた黄立鶴(Huang Lihe)教授をはじめ、多くの中国人語用論研究者と親しく研究や学術について対面でお話する機会があったことはとても有意義であったと思います。惜しむらくは、夕食会などの懇親の機会が学会幹部や関係者との懇親に限られ、PSJ で催される学会全体での懇親会のようなものがなかったため、一般会員の方々と交流する機会がきわめて限られていた点です。先ほどの使用言語の点も含め、海外から招待した研究者と一般会員の交流の場を確保している点は PSJ の方が国際的な学术交流の実質化(交流の垣根を低くすること)に努めていると言っていると思います。

最後に、CPrA の大会そのものから少し離れて、中国の言語学研究者と交流する中で気づいたことを述べさせていただきます。それは、中国の若手の言語学研究者が置かれている競争的な状況(いわゆる publish or perish)の厳しさとそれに向かっていく若手研究者の真剣さです。中国(そして韓国)の言語学研究者がよく口にする用語に「SCI」があります。これはご存じの方も多いと思いますが、Science Citation Index の略語です。多国籍情報サービス企業の Thomson Reuters が運営する科学技術分野の学術データベースで、世界的に評価の高い学術雑誌が登録されています。中国の研究者が、特に研究水準が一定以上の大学(例:いわゆる「国家重点大学」)の専任職を目指す場合に必要なのは SCI に登録されているジャーナルに採択された論文です。SCI に登録されているジャーナルはインパクトファクター(その雑誌に掲載された論文が引用される回数の平均値)が高い傾向にあり、応募者の研究能力を図る指標として多くの国で用いられています。例えば、語用論分野であれば *Journal of Pragmatics* はそのようなジャーナルです。中国の、特にこれから専任職を目指している若手研究者たちは SCI を意識して業績づくりに真剣に励んでいます。この点は(日本語学・日本語

教育学などの分野を除く) 韓国の言語学分野も同様と思われます。

一方、日本の言語学分野(そして人文学分野一般)は、SCI を意識するかどうかは個人の研究者に委ねられており、SCI と関係なく国内の学会誌等で業績を作り、専任職に応募して採用されるということが現在も可能です。もちろん、日本国内も大学の専任職は限られており、厳しい競争的な環境であることは事実です。ただし、中国や韓国の言語学分野に比べて、日本の場合はまだ業績評価基準のグローバル化は進んでおらず(ガラパゴス的状況かどうかはともかく)、最終的にも同様にはならないかもしれません。このような事情からか、中国や韓国の言語学研究者で日本の大学の専任職(例えば英語教育、日本語教育、中国語・韓国語教育など)に応募してくる方が増えているように思います。日本の若手言語学研究者も急に意識改革をする必要はないかもしれませんが、東アジアの隣国の若手研究者たちが SCI といった国際的な指標を意識した研究活動を進めており、日本の大学専任職のマーケットにも参入し始めている現状は知っておいていいように思います。日本でも、大学の専任職の公募や昇格において、SCI やインパクトファクターのような指標に照らして評価の高いジャーナルに論文が掲載されていれば有利であることは間違いありません。

以上、長くなりましたが、今回 PSJ の代表として CPrA の年次大会に参加し、招待講演と(限られた範囲ではありますが)学術交流を行った体験を報告させていただきました。来年はソウルにおいて CPrA と密接な関連のある East Asian Pragmatics(EAP)という国際学会の第3回大会が開催されると聞いております。CPrA の大会に参加して、PSJ からも EAP の大会に参加してほしいとの声も直接聞きました。EAP については、アジアにおける語用論分野の国際学会ということで有意義な催しと思いますが、PSJ の会員にとって参加や応募について判断する情報が不足しているように思います。EAP は国際学会組織ですが、加盟する学会が持ち回りの形で大会を当該国のいずれかの都市(の大学キャンパス)において開催していると側聞します。将来 PSJ にも EAP への加盟の打診があるかもしれませんが、国際学会大会の持ち回りの開催にはかなりの負担を伴うこととなりますので、学会および会員にとってどのようなメリット・デメリットがあるかについて慎重に議論を尽くす必要があると考えます。

私は、国際的な学術交流には様々な形があると思います。私が現在会長を務めている日本認

知言語学会(JCLA)は特定の海外の学協会と交流協定を結んでおりません。しかし、私を含めて JCLA の会員の方々が ICLC(国際認知言語学会大会)や IPrA(国際語用論学会)といった国際学会に自由に参加し、2019 年には JCLA が全面的に協力する形で第15回の ICLC を西宮市の関西学院大学キャンパスで開催させていただくことができました。このことは、国際的な学術交流のあり方に示唆を含んでいると思います。交流協定というのは一旦締結するとその後は通常ほぼ自動的に更新されていきます。締結当初の志(こころざし)も、双方の不断の努力がないとやがて形骸化し、一般の会員にあまり関係ないものになってしまいかねません。CPrA の大会に参加し、CPrA との交流協定のこれまでのあり方を反芻し、国際的な学術交流の実質化の難しさも感じつつ帰国いたしました。PSJ が今後、形に縛られることなく、柔軟で開かれた、一般の会員にとっても有益な国際交流のかたちを模索していくことを願っております。

* * PSJ28 (第28回大会) ご案内 * *

日本語用論学会第28回大会は、以下のとおり、慶應義塾大学三田キャンパス(東京都港区)で開催いたします。

◆日時: 11月29日(土)、11月30日(日)

◆場所: 慶應義塾大学(三田キャンパス)

〒108-8345 東京都港区三田 2-15-45

※大会、ならびに、懇親会に参加するには、事前参加登録が必須となります。詳細は会員メーリングリスト、学会ウェブサイトでお知らせしますが、期間内に事前参加登録(参加費・懇親会費納入を含む)をお願いいたします。

◆参加費(事前参加登録のみ):

会員(一般・団体): 2,000 円

会員(大学院生): 1,000 円

会員(学部生): 無料

非会員(一般・団体): 3,000 円

非会員(大学院生): 2,000 円

非会員(学部生): 無料

※オンラインで参加される場合、事前参加登録をした方に Zoom 情報をお知らせいたします。

※会場で参加費の支払いはできません。必ず事前に納入を済ませてください。

◆ 懇親会費（事前参加登録を推奨）：
会員（一般・団体）・非会員：5,000 円
大学院生（会員・非会員）：3,000 円
学部生（会員・非会員）：無料

◆ 大会テーマ
「カオスと秩序」

◆ プログラム（予定）
≪11月29日（土）≫
午前：ワークショップ
午後：口頭発表①・ポスター発表・総会・大会
発表表彰式・基調講演・懇親会

≪11月30日（日）≫
午前：口頭発表②・語用論茶寮（昼休み）
午後：口頭発表③・シンポジウム・閉会式

【基調講演】

「ポエティクスと語用論の接点」
片岡邦好先生（愛知大学）

【シンポジウム】

テーマ：混沌としたデータのなかに意味を見出す

趣旨：一見すると複雑で手に負えないと思えるような言語現象を丹念に精査し、そのなかに秩序やパターンを見出すことは、語用論という分野の際立った特徴です。本シンポジウムではこの複雑さに果敢に立ち向かい、無秩序にみえるようなデータから秩序を見つけ出す独自の研究手法を開拓してきた研究者 3 名を迎え、混沌としたデータを意味づける語用論のアプローチを論じます。

登壇者とタイトル：

「語りの多層性とカオスの秩序—史実伝承における対話性と認知—」

崎田智子先生（同志社大学）

「日常会話の中の『混沌』に見る秩序—日本語言い淀み形式の相互行為的分業体系—」

高木智世先生（筑波大学）

「訪問介護における共同調理—混沌とした台所で共同注意を達成する方法—」

細馬宏通先生（早稲田大学）

詳細は、後日お知らせいたします。

【語用論茶寮】

テーマ：アイデアの育て方

登壇者：

名塩征史先生（広島大学）

工藤俊 先生（駒沢女子大学）

趣旨：日常のなかでふと目にした面白い言い回しや気になる言語現象は、どのようにして「研究」へとつなげられるのでしょうか。興味関心を出発点に、研究テーマを見つけ、アイデアを育てていくプロセスについてお話しいたします。

【オンライン配信について】

すべてのプログラムは対面で行われますが、基調講演・シンポジウムはオンラインでも配信いたします。

【発表賞について】

例年の通常開催と同様、口頭発表、ポスター発表において事前に発表賞の審査を受けることを申告している発表者が対象となります。

◆ No Show に対する措置

発表が採択されたにもかかわらず、大会当日に大会発表委員会に無断で発表を行わない場合やポスターの掲示のみで説明を行わない場合は、これらを「No Show」とみなし、学会ウェブサイトにて公表します。ただし、事前、または、当日に（やむをえない場合には事後に）、発表を行えない（行えなかった）合理的な事情の説明がある場合には、「キャンセルされた発表」とします。

◆ 託児室について

本年の研究大会では、会場内に託児室を設けます。詳細は、後日お知らせいたします。

◆ 第 28 回大会会場・慶應義塾大学（三田キャンパス）への交通・宿泊について

〔大会会場について〕

会場：〒108-8345 東京都港区三田 2-15-45

慶應義塾大学三田キャンパス

最寄駅・所要時間：

田町駅（JR 山手線／JR 京浜東北線）徒歩 8 分

三田駅（都営地下鉄浅草線／都営地下鉄三田線）徒歩 7 分

赤羽橋駅（都営地下鉄大江戸線）徒歩 8 分

アクセス情報：

<https://www.keio.ac.jp/ja/maps/mita.html>



[宿泊について]

- ・日本語用論学会は、宿泊施設の紹介・斡旋はしておりません。
- ・東京都内の宿泊施設は大変混雑している状況です。できるだけ早めの予約をおすすめいたします。
- ・会場まで徒歩圏内のホテルを検索する際には、「田町」「三田」がキーワードとなります。また、「浜松町」「品川」「高輪」「芝」も、電車で1~2駅の距離であり大変便利です。

＊ ＊ 研究会コーナー ＊ ＊

◆メタファー研究会

- ・次回研究会は、「メタファーと実験（仮）」と題して、2026年3月19日（木）京都大学にて開催いたします（京都言語学コロキウム（KLC）との共催）。詳細は、随時研究会 Web サイト（<https://sites.google.com/site/metaphorstudy/>）に掲載します。みなさまの積極的なご参加、お待ちしております。（杉本 巧）

＊ ＊ 委員会・事務局より ＊ ＊

★『語用論研究』編集委員会より

中国語用論学会への招聘に関する報告を詳細に書かせていただきましたので、編集委員会のご報告は簡潔にさせていただきます。6月30日に投稿を締め切り、今回は20本の一般投稿論文がありました。昨年は9本であったことから今号は投稿がかなり増えたことになり、喜ばしく思います。このうち、扱っているテーマが語用論研究の範囲を超えるなど適格性を欠くと編集委員会が判断した3本を査読に付さない取り扱いとしました。残り17本に関して、担当主査（編集委員）を決め、現在外部査読委員による

査読が行われております。これとは別に、昨年大会の招待講演者であった金水敏先生の招待論文および6本の書評を掲載予定です。次号の締め切りは2026年6月30日（火）です。語用論の様々なテーマの意欲的なご投稿をお待ちしております。

（編集委員長 堀江薫）

★大会総務委員会プロシーディングズ担当より

日本語用論学会では、2005年度第8回大会より『大会発表論文集』（Proceedings）を発行しておりますが、2024年度第27回大会の論文集（第20号）は、本年7月に学会のホームページで公開されました。

以下、掲載された論文数をご報告いたします。

シンポジウム発表	4本
ワークショップ発表	17本
懇話発表	3本
研究発表（日本語）	23本
研究発表（英語）	2本
ポスター発表（日本語）	4本
合計	53本が掲載されました。

原稿をご提出いただいた会員の方々には、ご協力いただき誠にありがとうございました。

（中馬隼人・竹田らら）

《事務局より》

★会費納入のお願い

年会費は、一般会員 6,000 円、学生会員 4,000 円、団体会員 7,000 円（いずれも不課税）です。本学会は、会員の皆様に納入いただく年会費で運営されております。ご協力をお願い申し上げます。

【郵便振替】

口座番号：00900-3-130378

口座名：日本語用論学会

【ゆうちょ銀行】

支店名：099

口座種類：当座

口座番号：130378

口座名：日本語用論学会

学会ホームページの「会員専用ページ」にて、クレジットカード決済も可能です。会員ステータス、会費納入、会員専用ページへのログイン

等に関するお問い合わせは、下記までお願いいたします。

日本語用論学会 会員管理室

E-mail: psj-at-outreach.jp

★令和3年以降の激甚災害等による影響を受けた皆様へ

日本語用論学会では、激甚災害に指定された豪雨等の被害に遭われた会員の皆様に対し、お申し出いただくことにより「2025年度会費」ならびに「2025年度年次大会」の参加費を免除いたします。被災された皆様方の一日も早い復興を心からお祈り申し上げます。

日本語用論学会事務局

〒181-8612 東京都三鷹市下連雀 5-4-1

杏林大学外国語学部 八木橋宏勇研究室

E-mail: secretary-at-pragmatics.gr.jp

(事務局長 八木橋宏勇)

★《新刊・近刊案内》★

■『コメディで学ぶ語用論の基本概念』平田一郎 (著) 開拓社 (定価 2200 円＋税)



本書は、協調の原理、発話行為理論、ポライトネス理論といった、語用論における主要な概念について、理論的背景と実際の言語使用とを結びつけながら丁寧に解説する概説書である。実例として、主にコメディ番組からの会話をデータとして扱

っており、主要な文献を引用して立ち返りながら、データ説明が与えられている。したがって、本書を読むことで、理論を現実の言語使用の中で捉えることができ、また理論に立脚しながら言語使用をいかにして分析するのかを学ぶこともできる。最新研究成果も盛り込まれているため、発展した語用論の基本を学ぶことができる点は、卒論・修論の準備段階にある学部・大学院生だけでなく、理論研究・事例の分析を深化させたい研究者にも刺激を与える内容と言える。特に、会話データの説明は、非常に丁寧にわかりやすく書かれており、日常のコミュニケーション

ョンの中で無意識で理解し合う話者の営みが、明確に言葉で説明されることでずっきりとする感覚を味わいながら読み進めることができる、気持ちのいい一冊である。

(2024.7.23 刊)

■『誤解を招いたとしたら申し訳ない：政治の言葉/言葉の政治』藤川直也 (著) 講談社 (2,200 円＋税)



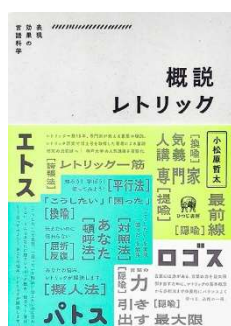
本書は、ニュースやソーシャルメディアを賑わせた、様々な政治家の発言を題材に、発話の意図や発話に伴う責任といった問題について言語哲学の立場から論じている。「あとがき」によれば、筆者が「自分の身近にいる専門家でない人たちに

も興味をもってもらえる本を書こうと思った」のが本書執筆のきっかけとのこと。本書の全体に渡って、グライスの会話の含みの理論やオースティンの言語行為論における基礎概念が議論の屋台骨を成しており、身近かつ世間での関心の高い具体例をふんだんに用いた語用論の入門書として読むこともできるだろう。本書を読むと、言語にまつわる諸研究分野の中で、語用論ほど現実社会で起きている問題の理解や解決に貢献し得る領域は無いのではないかと思わされる。本書は言語哲学の道具立てを駆使して政治家たちの発言の中の問題の在り処を論じているが、では、語用論の中の他のアプローチでは、政治家の言葉に、そして現実社会の諸問題に、どのような光をあてることができるだろうか。様々な立場の語用論研究者に刺激的な宿題を与えてくれる一冊と言えるだろう。(2025.2.14 刊)

■『概説レトリック：表現効果の言語科学』小松原哲太 (著) ひつじ書房 (定価 2,500 円＋税)

本書は、「よい」コミュニケーションとは何かを、古代ギリシアから始まるレトリック(修辞学・弁論術)の理論を通じて学ぶコンパクトな概説書である。現代言語学における狭義の「比喩」分野にとどまらず、修辞学における発想論・配列論・文体論の観点から、言語コミュニケーション上の効果にかかわるさまざまな要因や文彩パターンを取り扱う。一方で、修辞学にありがちな多数の修辞技法の羅列ではなく、言語学の観点から新たな体系化を模索している。

またこの本は、多様な言語コミュニケーションのジャンルから事例が挙げられており、お笑い、親子の会話、SNS、ジブリ映画のワンシーンな



ど、書き言葉以外の事例が文脈を含む形で多く収録されている。巻末には本書で網羅した修辞技法のリスト（事例、クロスリファレンス付き）が挙げられているほか、表紙の帯にまで工夫が見られる。本書は著者が得意とする鮮やかな体系化が随所に見られ、「よい」コミュニケーションとは何かを、理論的・実践的に考えるすべての人にお勧めの本である。（2025.3.25 刊）

■『[サーチエンジン・テキストエディタ・表計算ソフトで学ぶ 言語研究のためのテキストデータ処理入門](#)』 大名力著 ひつじ書房（定価：2,200 円＋税）

本書は、「利用可能なデータは多くとも適切な処理手段なしには有効活用することはできない」という考えのもと、言語研究に特化したツールではなく、サーチエンジン、正規表現、テキ



ストエディタ、表計算ソフトといった、比較的馴染みのあるツールを用いて、テキストデータを検索・加工する方法について学ぶことができるテキストデータ処理の入門書である。本書の第 1 章では、言語研究とテキストデータ処理について本書の目的を明らかにしたのち、第 2 章では、読者は、サーチエンジンによる英語表現の検索方法について、環境やツールの違いによる差や品詞ごとの検索方法について学ぶ。第 3 章では、正規表現によるテキストの検索について、正規表現とはどのような表現であるか、また、正規表現を学ぶ意義について理解を深めたのち、正規表現による検索方法を学ぶ。第 4 章では、テキストデータ処理のための基礎知識が概説され、第 5 章では、テキストエディタによる検索加工、第 6 章では、表計算ソフトによるテキストデータ処理の方法について学ぶ。本書は、読者が本書を読み進める過程で実際に手を動かし、処理の過程を確認しながら入力・処理・出力をセッ

トで捉えることでデータ処理の感覚を身につけることが可能となる一冊である。（2025.5.26 刊）

■『[「打ちことば」の研究ーモバイルメディアコミュニケーションから再考する日本語](#)』落合 哉人（著） ひつじ書房（定価 7,800 円＋税）



本書は、現代日本語において「話しことば」と「書きことば」の中間形態とされる「打ちことば」に着目し、現代社会における人々の言語生活に大きな影響を与えたモバイルメディア（携帯メール・LINE 等）の文脈で精緻に分析した意欲的な研究である。携帯メールや LINE といったメディアにおける談話を、対面会話やネット通話と比較しながら体系的に考察しており、日本語研究・コミュニケーション研究の新たな地平を開く試みとして高く評価できる。特に、2000 年代の携帯メールと 2010 年代の LINE を比較することで、媒体の変化とともに変容する打ちことばの特徴を明らかにしている点が斬新である。調査と分析においては、使用語数や文字数といった量的観点から、チャット形式をとる LINE の談話における「発話の分割」や「言語量とメディア特性」の関係を考察している。その機能や分析手法についても詳細に述べており、質的観察に偏りがちな領域における貴重な分析的補助となっている。また、文末・節末、文内部、接続詞・終助詞の出現傾向など、多様な観点から打ちことばの特徴を掘り下げている点も非常に参考になる。

『「打ちことば」の研究』は、打ちことばの基盤的特徴および既存の話しことばと書きことばとの関連性を論じ、その言語構造を精緻に探究した力作である。日本語学やコミュニケーション研究に関心をもつ研究者・大学院生にとって、非常に斬新な視点を提供してくれる一冊といえる。（2025.7.18 刊）

『「打ちことば」の研究』は、打ちことばの基盤的特徴および既存の話しことばと書きことばとの関連性を論じ、その言語構造を精緻に探究した力作である。日本語学やコミュニケーション研究に関心をもつ研究者・大学院生にとって、非常に斬新な視点を提供してくれる一冊といえる。（2025.7.18 刊）

■『[大学で学ぶアカデミック・ライティングの教科書：〈書く力〉を引き出す問い 109](#)』甲田 直美（著） ひつじ書房（2,400 円＋税）

本書は、大学のレポートや卒業論文、学術論文をはじめとする論理的な説明を要する文章力の養成を目的とした教科書である。しかし、実際には、アカデミック・ライティングを通して「研究」とは何かが分析され、「研究」に必要

な能力や作業工程についても丁寧に説明されており、まさに「研究の教科書」と言っても過言ではない内容となっている。「学び-問うこと



ができる人材の育成」を念頭に、テーマや問いの設定からデータ収集、分析、論証、論文としての文章化、そしてその論文が他者からのフィードバックを経て刊行に至るまでのプロセスが、豊富な事例と 109 の問いによって段階的に、実践的に解説されている。また昨今

注目を浴びている AI の活用についての見解をまとめた第 8 章「生成 AI を援用する」は非常に興味深い内容となっている。学生に限らず、論文執筆や研究活動に行き詰まりを感じた時には、ぜひ手に取っていただきたい一冊である。

(2025.7.25 刊)

★広報委員会からのお知らせ

会員諸氏に広くお知らせしたいと思いますので、語用論関連の新刊書・近刊書の情報があれば広報委員会宛にお寄せください。ご自身の著作はもちろん、恩師・同僚・友人・指導学生の出版物、比較的目にとまりにくい日英語以外の出版物なども歓迎します。なお、紹介文は出版社によるものを利用するほか、広報委員が執筆を担当しています。

PSJ members selected this section's recently-published and forthcoming books on pragmatics. We invite you to introduce books you recently published or highly recommend, to fellow members. Little-known books, and books written in your native language are especially welcome.

～編集後記～

■新学期の慌ただしさがようやく一段落したと思えば、秋の気配も束の間、一気に冬めいた寒さとなってまいりました。さて、今月末は第 28 回大会が目前に迫っています。堀江薫副会長による CPRA 参加記をはじめ、本ニューズレターの各記事が、大会での活発な議論の一助となれば幸いです。(横森大輔)

■秋学期に入り、授業や雑務に追われる日々ですが、学生とのやり取りの中で、思いがけず刺激を受けることがあり、新しい視点をもらっているように感じています。猛暑をようやく乗り越えて、気温の低い日も多くなり、季節の移ろいも感じます。これから、学会の大会も多くな

る時期でもありますので、充実した研究と交流の場に、期待を抱きながら日々を過ごしていきたいです。(野村佑子)

■すっかり秋らしくなり、何をするにも心地よい季節となりました。厳しい暑さの中では、ほんの少しの移動だけでもぐったりしてしまいましたが、今はは空気も澄み、過ごしやすく、思考もすっきり冴えるように感じます。そんな心地よい季節に学会シーズンが重なるのは、研究を進めるうえでも交流を深めるうえでも幸運ですね。長距離の移動も秋の風を感じながらだと不思議と楽しく、フットワークも軽くなります。皆さまにとっても、充実した実りの秋となりますように。(工藤貴恵)

~~~~~

日本語用論学会 Newsletter 第 54 号

発行：日本語用論学会広報委員会

発行日：2025 年 11 月 1 日

[広報委員会]

\* 委員長：横森大輔

\* Newsletter 編集担当：

\* 野村佑子・工藤貴恵

\* 公式ホームページ担当：

名塩征史・李頌雅

\* 会員メーリングリスト担当：

木本幸憲・盛田有貴

E-mail: webmaster-at-pragmatics.gr.jp